

死生学の形成過程

— 未完という視点からの一考察 —

The Formative Process of Thanatology

— Recognizing the significance of imperfection and incompleteness —

片 桐 史 恵
Fumie KATAGIRI

本稿では、死生学の形成の過程について様々な動向を整理し、死生学の言葉の変遷を明らかにし、生と死の学びの必要性について言及した上で、「未完の死生学」について「つながり」と「経験」の二つのキーワードを中心に検討し、生と死の教育のあり方と死生学の今後の可能性に関して考察した。

キーワード：死生学、未完、経験、つながり

1 序

なぜ死生学が注目されているのか、死生学とは一体どんな学問であるのか、その定義はどう定められるのか。そもそも「学問」なのか否かという問いに対し、万人を納得させる答えを持ち合わせている研究者は幾人いるであろう。著者自身も万人を納得させる解答を持ち合わせているわけではないが、死生教育に関わる研究者として自らの立ち位置と死生学の探究のために明示しておくことの必要性を感じ取りあげる。本稿の目的は、日本における死生学の形成過程に焦点を当て、その歴史的背景と特質を整理し、死生学の展開の経緯と今後の課題に関して考察するものである。

2 死生学の形成過程

1) 様々な動向について

生と死の問題について、専門職のみならず多くの人が注目し、議論が活発になるきっかけとなったのは、1960年代後半から、1970年代にかけての、イギリス及びアメリカの動きである。具体的には、1967年にシシリソンダースが現代的な意味におけるホスピスを設立し、同じ時期にエリザベス・キューブラー・ロスが著書『死ぬ瞬間』を出版した。新たな「死」への取り組みと「生」への援助のあり方として多くの示唆を与え多大な影響を与えた。その影響は、瞬く間に日本にも広がり、1977年には、専門家も一般市民も集える「日本死の臨床研究会」が開催され、1982年には、市民の活動としての会「生と死を考える会」が、創設されている。1981年には、静岡に聖隷三方ヶ原病院に、1984年には、大阪に淀川キリスト教病院にホスピスが設立され臨床の現場において尊厳ある生と死の寄り添いのために様々な取り組みがなされるようになる。1993年には東洋英

和女学院大学大学院が、日本の大学院で最初に死生学研究コースを開設し、1995年には、表題に「死生学」と研究名の付く初の学会「日本臨床死生学会」が開催された。2002年には、東京大学にて21世紀COE「死生学の構築」プロジェクトが立ち上がり、2007年からは「死生学の展開と組織化」が進められている。大学における死生学研究所として聖学院や明治大学においても学際的な取り組みがなされている。

2) 死生学という言葉について

英米では、ThanatologyとDeath studiesという領域が急速に成長していった。直訳すると「死学」や「死の学問」であるが、日本では、英語のThanatologyやDeath studiesの語の訳として何故「死生学」という言葉が使われるようになったのか。1970年から80年代にかけ「死生学」の語が使われ始めたとき、何故「死生学」ではなく「死生学」の語が用いられたのか。

一つには、この語を積極的に用いようとした人々の関心がまずは死にあり、死という文言が先に登場する語が好まれたという理由が考えられよう。また、他の理由としては、すでに「死生観」という文言が以前から用いられていたという理由も介在していると考えられる。「死生観」という文言は、1904年に加藤咄堂が『死生観』を出版して以来使われるようになった。つまり、日本では「死生観」という語は、今すでに100年以上の歴史を有していることになる。日本の死生学は、死生観の学としての要素を根底にもっているのである。生と死は、表裏一体のものであり、分離してとらえることはできないという意味において本来直訳で「死学」や「死の学問」と訳されるところを取って「死生学」と訳した日本の訳は興味深く、さらに現在、日本では「死生学」

を、Thanatology若しくは、life and death studies、Death and life studiesと英訳しており、定訳はないが、今後いかなる定訳に収まるのか議論を尽くす必要がある。

まだまだ現状として死を忌み嫌う我々の置かれた状況の中、「死生学」という呼称において、「死」への気づきと意識の覚醒を促す意味においても「死」を前面においた「死生学」という言葉の持つ意味と役割は大きいと考える¹。「死生学」という新しくも古い言葉がどんな使命を持って社会においての働きをするのであろうか。また、「死生学」なのか「生死学」どちらの呼称が妥当であるのかという議論、若しくはまったく新しい呼称が求められるという時期がいずれ来るのかもしれない。

3) 生と死について学ぶ必要性について

「死」、「生と死」や「死生」というテーマで集約しひとまとまりのものとして学ぶ必要があるのはなぜかの問いに対しては、「第一に、今日の死生学は臨床死生学を基軸としていること…（中略）第二に、これまで伝統的に受け入れられてきた死生に関わる儀式や文化が必ずしもなじみ深いものでなくなり、その意義をあらためて問い直し、時には生死に関わる新たな儀礼や文化を構築し直す必要があると感じられているという事情がある²」。そして、「第三に、死生をめぐる根源的な感受性、すなわち『いのちの尊厳』とよばれるようなものへの感受性が弱まっていると感じられているということがある³」との見解が示されている。そして、『死生学—死生学とは何か—』の著書の中で、島藺氏は、「日本では、生と死が表裏一体のものとしてあるような生のあり方、また死と隣り合わせとしての生の危機的な状況に関わる諸問題、また『いのちの尊厳』が問われるような諸問題を死生学とよぶような伝統が形成されてきた⁴」とし、「これは欧米の死生学が意味するものを含みつつ、それよりも明らかに広い領域を指し示すものである⁵」と述べている。「決定的に失われてしまう、生の計り知れない大切さやかけがえのなさを示す⁶」意味における、この「いのちの尊厳」について引き続き考察し模索することは死生学の構築を推し進める上において必要不可欠な要件である。生と死の学びは、年齢を超え、場所を超え、時を越え行うことが重要であると考え。時には通時的な流れで、時には共時的理解において解明することが必要ではないか。社会や学校そして家庭においての取り組みの具体的検討の重要性と共に、個々人の感性と感受性を豊かにするための生と死の学びのあり方の検討が今求められているのではないか。感じる力を伸ばすための生と死の学びであらねばならない。

4) 未完の死生学について

学問であるか否かをどのような尺度で測り、意味づけし、判断するのか。学問領域に共通する研究方法や調査

方法が定まっているか否かであろうか。そうであると主張する研究者にとっては死生学は学問ではないと言われるかもしれない。死生学は決して一つの研究方法で研究され導かれるものではないからである。臨床、人文の研究手法の違いは明確であるからである。「混沌」とした状態、そこへ切り込む研究方法の全てが死生学の方法であるにとらえる発想の転換が必要ではないか。混沌とした世の、混沌とした状況の中にいるこれまた混沌とした我々自身である、その「混沌」の意味を捉えなおすこと自身に意味があると考え。

学問という言葉を、「学び問う」「学びあい問い続ける」「学びながら問いかけるもの」「問いながら学ぶ」ものであると捉えたとするならば、死生学は一学問として我々にその存在意義を主張しているように思われる。

死生学は、未だ形成の過程であり「未完」である。しかし「未完」であることが死生学の死生学たる所以であると考えすることはできないか。完成した学問であると捉えたと実は学問としての限界がそこには存在するように感じる。「まだまだ」と教員、研究者が感じた時、その「学問」は無限の広がりをも有するのではないか。死生学は寄せ集めでなく、欠けて未完のものが、立体や球体パズルの様に大小様々な大きさのパーツがこれまた様々な角度から組み合わさり、形を成そうとする「必要不可欠な集合体」なのではないか。大小様々な形の不完全なもの同士が合うときもあれば、合わないこともある。人にしては合う人もいれば合わない人もいる。深い交わりも時間軸の関係で交わり溶け合う場合もあるし、ゆがみやひずみを生じさせる場合もあるであろう。人でいえば、雰囲気の良い溶け合うグループもあれば、時間の流れの中でゆがみひずみがでて離れることもある。人に無限の可能性があるように、「未完の死生学」は無限の「死生学」の可能性を示しているといえるのではないか。

3 生と死の教育と生きる意味を考える

教育の場において生と死の学びにどう取り組むか、その取り組みのあり方は、非常に重要な検討課題である。なぜ生きているのか、生きることは何かと思ひ悩む学生らといかにつながり、互いに高めあえるのであろうか。学生の「人は何のために生きているのか」との問いにどのような答えを示すことができ、あるいは、家族や友人を亡くした学生にいかに寄り添うことができるのであろうか。人間としていつか訪れる自らの死や家族の死を受けとめ、医療や福祉の現場に飛び込んでゆく学生らに専門職としての誇りを持ち活躍してもらうための知識とはなにか。

我々の生きる意味とは何か。我々は、与えられた命の長さの中で、ひたすらに経験を積むのではないか。経験には、忍耐の必要な経験もあれば、辛い経験もある。人生そのものが修行であり、学びであるならば、この経験をする事、その事こそが、我々の生きる意味なのである。

と捉えるのである。例えば、「あの辛い思いがなければ、今の幸せも感じる事ができない」との感覚のように、幸せとは、決して万人共通の定義は定められない。幸せを議論する時、幸福感をとらえ議論する必要がある。一人も友達のいない人が、一人心の許せる友人が出来たならば、その人は、「幸せ」を知る事が出来る。幸福感を感じることができる。孤独感を味わったからこそ幸福感を知るのである。食べ物に恵まれない人は、お茶碗一杯のご飯で至上の幸せを感じることができる。幸せとは、その人の心の中にある。その人の経験の中に存在するのではない。マイナスとプラスの経験の両方がある。今の自分がいる、その自分を肯定することこそ、今を生きることであり、明日への原動力であり、活力になるのではない。我々を取り巻く現代社会において我々を一番苦しめるものは、自己肯定感の低下なのではないか。どんな状況や環境に置かれたときも、それを「かけがえのない経験」と捉えることにより、自分自身の心と未来に光を当てることのできるのではない。以上のように考えるとマイナスの経験、プラスの経験であるとの意味付けが逆転する。言い換えれば、マイナスの経験と自ら負の経験として意味付けしたものは、人生において決して負の働き・負の作用をしてはいないのである。つまり、人が生きる意味は、多様な経験をする、全ての経験がその人が生きる意味そのものなのであるといえる。著者の考える生きる意味は「経験」一語である。

生と死の学びとしての死生学は、自らを幸せにし、自分に関わる周りの人に幸せを運ぶ学問であらねばならない。死生学は、「経験」の分かち合いである。緩和ケアに携わる医師や看護師、ボランティア、愛する人を亡くし深い悲しみの中にいる遺族、多種多様な喪失体験の中にあり困難を抱えている全ての人の「経験」の「つながり」が人を救うのである。死生学に与えられた働きがあるとするならば、それは、生と死を「つなげ」、経験の「つながり」を感じ感謝し、相手と私を「つなぐ」役割であろう。人間も地球も宇宙も旅の途中である、その営みの中で生まれている死生学は、勿論旅の途中であり、未完である。我々は、人として、また与えられた仕事において働きを成そうとする時、時として「完全」であろうとする。その完全、パーフェクションを求めるがゆえに苦しみ苦悩する。われわれ自身も、人間関係も学問も研究も教育においても未完で万能でないことを認識し、万能感を捨てることも重要である。既述の、死生学は寄せ集めでなく、欠けて未完のものが、立体や球体パズルの様に大小様々な大きさのパーツがこれまた様々な角度から組み合わせたり、形を成そうとする「必要不可欠な集合体」なのである。大小様々な形の不完全なものが合うときもあれば、不完全な状態のまま離れることもあるであろうし、離れ方が激しければ、小さいものが壊れてしまう。深い交わりも時間軸の関係でゆがみやひずみを生じさせる場合もあるであろう。ズレや欠けが経験であり、ズレ

がずれっぱなしも経験である。不完全で浮かんでいるのも経験である。

4 結びにかえて

なぜ死生学が注目されているのか、死生学とはいかなる学問であるのかを、死生学の形成過程に焦点を当て、その歴史的背景と特質を整理し、死生学の展開の経緯と今後の課題に関して考察を行ってきた。人間はなぜ生きるのか、生きる意味とはいかなるものであるかに正面から向き合う学問が死生学である。「生と死」「悲しみと喜び」「静と動」一見すると相対するものであるが、実は分離できないほど複雑に混ざり合い、支えあい、意味を与えあっている。このつながりからの経験、そして経験からのつながりが、生と死のつながりとなっていく。

我々がもし生きる意味とは何かという命題に真正面から向き合わなければならないとするならば、その答えは「経験」一語であると考え。我々は、与えられたいのちの長さの中で、「経験」の貯金をするのである。経験には、技術的能力向上のための経験もあるであろうし、身体能力の向上も考えられる。そして社会的能力や精神力やスピリチュアルな学びとしての経験も含まれる。忍耐の必要な経験もあれば、辛い経験もある。人生そのものが修行であり、学びであり、この経験をする事、その事こそが、我々の生きる意味なのであると捉えるのである。つまり、マイナスとプラスの経験の両方があることへの肯定であり、感謝であり、賛美である。マイナスとプラスの経験の肯定は、現状の肯定であり、自己の肯定をも意味する。全てを「かけがえのない経験」と捉えることにより、自分自身の心と未来に光を照らすことを意味し、そしてそれは、自分につながる人のいのちに光を照らすことにつながる。経験の持つマイナスとプラスの意味づけが不必要になる。マイナスの経験と負の経験として意味付けしたものは、人生において決して負の働き・負の作用をしてはいないのである。多様な全ての経験がその人が生きる意味そのものなのであり「幸せ」への第一歩なのである。幸せに万人共通の定義はない。幸せは、幸せとを感じる「幸福感」を意味するからである。幸せとは、その人の感じる力であり、「全ての経験への感謝」である。その意味において、死生学は、自らを幸せにし、自分に関わる周りの人に幸せを運ぶ学問であらねばならない。そのために、死生学の根幹に「経験」「つながり」の持つ意味の探求をすすめる必要がある。緩和ケアに携わる医師や看護師、ボランティア、愛する人を亡くし深い悲しみの中にいる遺族、多種多様な喪失体験の中にあり困難を抱えている全ての人の「経験」の「つながり」が真の意味において、人を救うのである。1人称の死、2人称の死、3人称の死の研究の分類全てをつなぐキーワードが「つながり」と「経験」である。

死生学は、生と死を「つなげ」、経験の「つながり」を感じ感謝し、相手と私を「つなぐ」という役割を果たす

べく生まれ出て、今存在していると理解したい。

図1は、つながりの死生学、そして生と死のつながりや生と死に寄り添う学びとしての死生学を示している。まさに、生と死は表裏一体であり、その表裏一体である生と死を見つめ考え、議論する学問である死生学の特質を示している。

今後、生と死の学びがどのような深まりを見せ、いかなる発展を成しえるかは未知数である。人間も地球も宇宙もある意味旅の途中であり、その営みの中で育まれている死生学は、勿論旅の途中である。未完である。しかし未完であるがゆえに生と死の教育と死生学は無限の広がりを持つといえるのである。



図1. つながりの死生学

東京大学出版会 (2008年) 16頁

- | | | |
|---|-------|-----|
| 3 | 前掲注 2 | 18頁 |
| 4 | 前掲注 2 | 27頁 |
| 5 | 前掲注 2 | 27頁 |
| 6 | 前掲注 2 | 26頁 |

注

- 1 死生学と名のつく書籍の出版については、下記の文献を例に挙げることができる。

日野原重明・山本俊一編『死生学・Thanatology』技術出版 (1988年)

日野原重明・山本俊一編『死生学・Thanatology 第2集』技術出版 (1989年)

日野原重明・山本俊一編『死生学・Thanatology 第3集』技術出版 (1990年)

平山正実『死生学とはなにか』日本評論社 (1991年)

山本俊一『死生学のすすめ』医学書院 (1992年) 山本俊一『死生学 他者の死と自己の死』医学書院 (1996年)

竹田純郎・森秀樹編『〈死生学〉入門』ナカニシヤ出版 (1997年)

河野友信・平山正実編『臨床死生学事典』(2000年)

細見博志『生と死を考える―「死生学入門」金沢大学講義集』北國新聞社 (2004年)

平山正実『はじまりの死生学―「ある」ことと「気づく」こと―』春秋社 (2005年)

島蘭進・竹内整一編『死生学 1 死生学とは何か』東京大学出版会 (2008年)

島蘭進・竹内整一編『死生学 2 死と他界が照らす生』東京大学出版会 (2008年)

島蘭進・竹内整一編『死生学 3 ライフサイクルと死』東京大学出版会 (2008年)

島蘭進・竹内整一編『死生学 4 死と死後をめぐるイメージと文化』東京大学出版会 (2008年) 島蘭進・竹内整一編『死生学 5 医と法をめぐる死と生の境界』東京大学出版会 (2008年)

岡部健・竹之内裕文編『どう生き、どう死ぬか―現場から考える死生学』弓箭書院 (2009年) 他。

- 2 島蘭進・竹内整一『死生学―死生学とは何か―』